
不思議な本屋で

棒人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議な本屋で

【Nコード】

N1064Z

【作者名】

棒人間

【あらすじ】

主人公が本屋を見つけたみたいです。

其処に入って行くと…？

来店（前書き）

こんな本屋有ったら良いのに。 と思って書いてみました。

良かったら。

来店

薄暗くランタン型の電灯がほの暗く光る店内。

天井まで届きそうな程高い本棚がひしめく。

それでも本棚に寄せきれず直接通路の至る所に本が積み上げられている。

少し埃っぽい空気に古い本の匂いが漂いなんともいえない気分。

上手く形容出来ない自分のボキャブラリーの無さにがっかりした。

最近見つけた本屋さん。

一見したら魔法使いが奥にいたりしてもおかしくない独特の雰囲気
が気に入ったのだ。

順番に本の背表紙を眺めて行く。

特に何か探している訳じゃないけどなんか眺めて行くと満足感が湧いてくる。

途中に煤けた赤色の大きな本があった。

知ってた本じゃないけど頭が1人だけ飛び出していたのでなんとなく
目についた。

出る杭は打たれる。

人差し指で引き抜こうとしたが本がぎゅうぎゅうにきっちり仕舞わ
れていたので取り出せない。

えいつ、と指を3本に増やして引き抜く。

本と一緒に大量の埃まで引き出された。

頭の埃を払い、本の表紙を眺める。

悪魔が1体描かれていて、悪魔の頭の付近に英語と小さいカタカナ
でタイトルが綴られている。

一瞬召喚陣や魔法薬な想像を頭の中で描いたが中身は魔法と悪魔の冒険物のお話だった。

少し読み進めてみるととても引き込まれて時間を忘れてしまった。

「…ファンタジーな本をお探しですか？」

不意に横から声が掛かったのでびっくりした。

ここの雰囲気通り魔法使いみたいな姿の…って事は無くて背が高く少し細身の青年が立っていた。

身体が反射的に手に持っている本を胸当たりに両手で持ち盾の様にしていたのに気付いたのでおろす。

「あ！いえ違います！ただふらつと立ち読みでもしようかなって。」

青年はにこりと笑い「そうでしたか。お邪魔して申し訳ありません。ごゆっくりどうぞ。」と謝ってから本棚の最上段の本を一冊抜き取り奥に戻って行った。

もしかしてここの店員さん？

時計を確認してそろそろここを出ることにした。

この本を買いたいけど奥に行けば良いのかな？

狭い通路の本の小山を越えて本棚の端まで辿りつく。

さっきの青年がレジの奥で椅子に座って本を読んでいた。

なんとなくぼーっとしていたら青年の方から話しかけられた。

「あ、さっきの方ですね。どうぞこちらに。」

そう言っただけで青年はレジの台に載せられていた本をどかし、スペースを作った。

「600円になります。」

定価2400円なのに何故だろう。

確かめたらこの本は古本の棚の本だったらしい。

「珍しいかも知れませんがあちらが新品、残りが全て古本です。」

そんなシステムで経営してたらやりにくい気がするけど。

商品を受け取り狭い通路を通り外に出た。

また今度ここに来よう。

そう考え帰路についた。

イクスチェンジ！

この間来た本屋さんの前に立つ。

なんでこんな裏路地みたいな所にあるんだろう？

何か秘密があるのか、秘密しか無いのか。

自分しか知らない秘密の鍵を手に入れた様な気がして両手で小さくガツポーズをした。

はたからみたら変に見られたかもしれない。

相変わらず埃っぽい店内。

花粉症の人は入れないと思う。

本をまた眺めていくと奥から人が近付いてくる。

あの青年かと思っていたが30歳位にみえる男の人だった。

店長かと思ったがそのまま店から出て行ってしまった。

あの青年は今日もいるのかな。

居た。

無駄だろうにはたきで本の手入れをしている。

叩いたそばからまた埃が積もっていた。

「いらつしやいませ。」

にこりと笑ってからまた叩く作業に戻る青年。

…一生懸命だったので指摘しないで横を通り過ぎる。

すると青年に話しかけられた。

「あ、そういえばこの間ご購入された本どうでしたか？ 僕、あの本の上巻特に好きなんですよ。」

まだ半分も読んでいないがかなり面白い。

普段本を読まない私が言うんだから面白い、と思う。

「全部はまだ読んで無いんですけど面白いです。次の展開が常に気になってわくわくします。」

青年はそれを聞くと気に入って戴けてよかったですと言って今度は通路に積まれている本を開いた本棚の隙間に入りはじめた。

「そつえばさつき人が居ましたけど店長とかですか？」

「いえ、その人はお客様です。店長は僕ですよ。」

自分と余り変わらない歳に見える青年が店長とは驚きだった。

「お客様とこんなに話したの初めてかも知れませんが。余りお客様は来られませんし。」

さつきの男の人がお客だと聞いてちよつとがっかりしたり。

「レジの所まで向かって右に折れて少し奥だったの所に机と椅子がありますから立ち読みしづらかったらご利用ください。」

本屋だったり古本屋だったり図書館だったり忙しいお店だ。

本読まない私が唯一昔読んでいた本を見つけて懐かしく思えて読み返す。

内容は主人公が異世界に召喚されて…といったどつかでありそんな話。

気付くと対面の椅子に座って文庫本を読む青年がいた。
本の整理は終わったんだろうか。

「良いんですか？ お客さんとか来たら…。」

「大丈夫ですよこの時間帯に人来ませんから。」

そういえばここ本しかない。

いや、本しか無いのは当たり前なんだけど。

じゃなくて漫画は無いんだろうか。

訊いてみた。

「ああ、こんな所に漫画を売りにくる人居ませんし。 僕自身漫画読まないので新品の棚にもおいてないんです。」

これは驚きだ。

本を読まないならあるだろうけど漫画を読まないとは。

青年に漫画を読まない事が如何に人生において損失となり得るか説く。

すると青年に本を読まない事が如何に人生において損失となり得るか説かれた。

お互い様だった。

「じゃあ、私が面白いと思う漫画持って来ますから、ええっと…名前なんですか？」

「白川です。」

「ありがとうございます。だから、白川さんも私にオススメの本を教えてくださいませんか？」

そう提案した。

お互いに読まないのならお互い教え合えば良いんだ。

白川さんはこの提案に賛成してくれた。

文庫本などばかり読んでそれ以外絶対読まないとか頭かちかちの人とかじゃなくて安心良かったと思う。

今日の所は帰ることにして白川さんと別れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1064z/>

不思議な本屋で

2011年12月5日11時45分発行